

---

# ビルマ(ミャンマー)折畳み写本、貝葉文書 保存共有プロジェクト

——福岡アジア文化賞2005年度学術部門受賞者ウー・トーカウン氏に聞く

**Collaborative Project to Preserve Traditional Manuscripts in Myanmar:  
Interview with U Thaw Kaung, Academic Prize Laureate, Fukuoka Asian Culture Prizes 2005**

齋藤照子 SAITO Teruko

(東京外国語大学大学院地域文化研究科・教授)

---

本COE、在地固有文書研究班の活動の一貫として、ビルマにおいては、17-19世紀コンバウン時代の折畳み写本、貝葉文書の保存共有事業を2003年から展開している。この共同事業を立ち上げ、遂行してゆくのに当たって、多くの助言、助力を頂いた元大学中央図書館長ウー・トーカウン氏が、2005年度の福岡アジア文化賞の学術研究賞を受賞されることになった。その受賞理由としてあげられているのは、氏の長年にわたるアジア図書館学の発展への寄与であり、とりわけ貝葉文書を中心とする古文献保存学における功績が高く評価されたものと伺っている。私たちのプロジェクトにも、ミャンマー伝統文書保存委員会からの代表として加わって頂いているウー・トーカウン氏に、今回の受賞を踏まえて、氏のライブラリアンとしての活動や折畳み写本、貝葉文書の保存の意味などをお尋ねし、そして本COEによる保存共有事業に対するビルマ側の評価についてもお話を伺った。

## ビルマ(ミャンマー)における在地文書の保存共有事業の経緯と内容

2003年5月21日、本COEとヤンゴン大学構内に本部を置く全国大学共同機関である大学歴史研究センターとの間に、古文書の保存と共有のための協力協定を締結、この協定に基づいて、18-19世紀の折畳み写本(パラバイツ)及び貝葉文書(ペーザー)のマイクロフィルム撮影及び、TIFF形式によるデジタル化事業が開始された。このプロジェクトの立ち上げに際しては、元大学中央図書館長であり、ミャンマー伝統文書保存委員会の副議長でもあるウー・トーカウン氏に様々な助力をいただき、ミャンマー教育省の許可の下に、はじめることが出来た。

保存共有の対象としたのは、18-19世紀のコンバウン時代の折畳み写本、貝葉文書の中から、契約文書、証書類を第一優先順位とする、裁判記録、遺産分配目録、慣習法などの記録をも含めた文書群とし、これまでにマイクロフィルム撮影、あるいはデジタル化による保存がまったく行

なわれていないオリジナル原典である。残存する写本の大半を占める経典の書写は、対象から除外している。

文書のマイクロフィルム撮影と目録の作成は、前大学歴史研究センター長であり、写本原典によるコンバウン史研究で著名なウー・トーフラ氏を中心として、大学歴史研究センターが行い、デジタル化については、学術文献のデジタル化に実績を持つ Myanmar Book Centre が行うこととし、文書の選定については、日本側の斎藤がビルマ側と協議の上、優先順位を慎重に決定した。

2003年度は、大学歴史研究センターおよびウー・トーフラ氏の所蔵する折畳み写本を中心に、350枚のTIFFファイル、PDFファイル1枚、マイクロフィルム2巻に約2000点の文書を収録し、ウー・トーフラ氏による目録を作成した。これらの文書は、マンダレー大学の歴史学部がウー・トーフラ氏の下に長年の間中部ビルマ各地から収集してきたものであり、ウー・トーフラ氏の大学歴史研究センター長への転任に伴い、ヤンゴンに移された契約文書を中心とする折畳み写本群である。

2004年度は、中部ビルマのメイッティエラ地方に拠点を移し、メイッティエラ大学に所蔵されている折り畳み写本、貝葉のほか、近隣の村、僧院に残る文書群を対象に撮影を行ない、TIFFファイル167枚、PDFファイル1枚、マイクロフィルム2巻を作成、約1500点の文書を収録した。目録は、メイッティエラ大学図書館司書ウー・ウィンティン氏がウー・トーフラ氏の監修の下に作成した。

2005年度については引き続き、メイッティエラ地方で未収録であった文書群および、ミンジャン地方に残る文書の撮影、デジタル化による保存を行なっている。

これらの文書のうち、原典所有者の承諾を得られるものについては、順次本学の電子図書館 Dilins 上で公開してゆく予定である。

## ウー・トーカウン氏へのインタビュー

(2005年7月27日 Myanmar Book Centre 応接室にて)

—この度は、福岡アジア文化賞の学術部門における受賞おめでとうございます。ビルマからは、タントゥン博士に続くお二人目の受賞者ですね。

ウー・トーカウン：ありがとうございます。生涯、一ライブラリアンとしてすごしてきた者の活動を評価していただいたことを、とても嬉しく思っています。

—お若いときからライブラリアンを生涯の仕事と決めておられたと伺っています。図書館学を目指されたのは、著名な教育者、歴史家であったお父上の影響があったのでしょうか。

ウー・トーカウン：ええ、確かに父の影響はとても大きかったと思います。私の父、ウー・カウンは本の収集家で、育った家には本があふれていました。ビルマ語と英語の書籍が主体で、詩、



ウー・トーカウン氏

節が痛み歩行が困難でしたから、学校にも通えず、外で遊ぶことも出来ませんでした。それで自然に本を読んですごすことになりました。それはもう、テレビもゲームもない時代ですからね。

——ラングーン大学では、英語、ビルマ語、歴史、地理、人類学と幅広く学ばれ、1959年卒業と同時にヤンゴン大学図書館で副館長としてウー・テインハンの下で働かれたのでしたね。それから1960-61年にはロンドン大学で図書館学を修めて修士号を得、再び大学図書館に戻り、そして69年からは大学中央図書館の館長の職につかれ1997年に退官されました。この間、71年には図書館の中にヤンゴン大学図書館学部を立ち上げ夜間の大学院コースを設けられました。その後もミャンマー歴史委員会や、伝統文書保存委員会の副議長、東南アジア図書館会議の執行委員、そしてSEACAP (Southeast Asian Consortium for Access and Preservation) のミャンマー代表など、数多くの役職を現在まで続けてこられました。30年以上に及ぶこうした精力的な活動を貫く原点と言うか、活動の指針をどのような点に置かれてこられたのでしょうか。

ウー・トーカウン：私は、ライブラリアンとして、二つの重要な課題に答えてゆきたいと常に考えてきました。一つは、ミャンマーの人々に自分たちの歴史と文化を忘れないように助力すること、もう一つは、国籍や民族、性別を問わず、問いを心に持っている人々が、その問いに答える

古典文学から歴史、社会、政治、経済、文化に至るあらゆる本がありました。それからもう一人、ゾージーというペンネームで知られ、国民詩人として敬愛されているウー・テインハンさん、彼は父の大的親友でしたが、この二人の話を身近に聞きながら育ったことは、私の精神に深い影響を与えたと思います。ウー・テインハンさんは当時大学図書館の館長でしたが、私がラングーン大学を卒業するや否や、まだ19歳の私を彼の後継者として指名したのです。これは驚きでしたが、私自身もラングーン大学在学中には図書館が私の働き場であると心の中で決めていました。

それから、幼時の私はとても身体の弱い子供でした。身体中の関

ために必要な書物を手に取ることができるよう、手助けすることです。

—お国では、大学がしばしば閉鎖されるなど、知的対外交流と言う点でも、たいへん困難な状況がしばしば生じてきました。こうした中で、国籍を問わず、ミャンマーの文化、歴史を研究するあらゆる研究者に援助の手を差し伸べてこられたのは、ごく少数の方であり、ウー・トーカウンさんだけが頼りであるという時もありました。どのような信念からこうしたことを続けてこられたのでしょうか。

ウー・トーカウン：そうですね。オーストラリアのウェスタン・シドニー大学で名誉博士号を授与されたときにも、それとまったく同じ質問を受けました。その答えは、その時の答礼スピーチで申したとおりなのですが、自由についての私の信念を率直に述べたので、ちょっと問題になるかもしれませんね……。

確かに大学が長期間にわたって閉じられた時にも、私と私の同僚は図書館を開いて、知識を求める人たちのサンクチュアリにすべく努力してきました。ミャンマーが孤立している時、ヤンゴンの大学中央図書館は世界中の研究者を歓迎した数少ない機関の一つでした。

私は、人々が問いを発し、自分自身で答えを見つけることができる時、社会は自由であると考えています。自由の中で生きるということは、いろいろな定義があるでしょうが、私自身は才能ある人々が大学で学ぶことができること、そして誰でもが図書館を訪れることができること、この二つがもっとも大切であると信じているのです。

私の職業が命じる責任として、私にはミャンマーの国民がその文化に図書館を通じてアクセスできるようにする義務があります。また図書館を“真実の灯台”とするためにあらゆる適切な手段を講じる義務もあります。

—中央図書館長をなさっている時から、その図書館活動の最重点課題のひとつとしてミャンマーの伝統的な文書、折畳み写本、そして貝葉文書の保存収集に力を入れてこられたと存じています。こうした活動の意味、折畳み写本、貝葉文書の価値について、どのように考えておられるのでしょうか。

ウー・トーカウン：これらの資料は、ミャンマーの人々が古くから文字に親しみ、非常に多様な記録を書きつけ、残してきたことをよく示しています。人々が残してきた写本の中には、経典から慣習法、詩、文学、契約、占星術、裁判記録、伝統医薬など、とても豊富な過去の生活、文化の記録が残されています。伝統文書は、過去を再現することを可能にし、私たちの現在を照らしてくれるものでもあります。私が館長であった時、貝葉文書と折畳み写本を扱う専門部を作り、各地の僧院などからこれらの文書を収集、修復、保存事業を進めてきました。歴史家をはじめ、それぞれ専門領域の学者と共同して、これらの保存、整理、修復に当たることは私たちライブラリアンとアーキビストの大切な任務です。戦争で貴重な蔵書、文書をすべて失った大学中央図書館ですが、長い時間をかけて、退官した1997年までに、1万6千冊以上の写本を収集することが出来ました。

—今、お話の中に戦争による図書館の被害ということがありました。これはひとりの日本人として気になるところですが、1942年から45年にかけての第二次世界大戦中、日本軍による占領時代には、現在の国立図書館の前身であるバーナード・フリー・ライブラリーが憲兵隊に接収され、大学中央図書館も日本軍に接収されたと聞いています。戦争中の図書館の状況について何か記憶されているでしょうか。あるいはお父上やウー・テインハンから何か聞き及びでしょうか。

ウー・トーカウ：私は1937年生まれですので戦争中はまだ幼く、私の承知していることは自分の直接の見聞ではありません。ウー・テインハンをはじめとする周囲から聞いたこと、あるいは戦後の図書館復興の過程での調査などから知ったことです。

バーナード・フリー・ライブラリーが接収されるということがわかると、ウー・テインハンが中心となり何人かの有志のグループを作り、この図書館の貴重な資料、たとえばキンウン・ミンジーの写本、貝葉文書のコレクションなど、王朝時代の文書のほとんどすべてを、ひそかに移動することになりました。宗教施設は日英どちらからも爆撃されないだろうということで、シュエダゴン・パゴダの近くの僧院が選ばれ、そこに運び込みました。車が使えないので、箱詰めにして手で運んだと聞いています。こうしてバーナード・フリー・ライブラリーの貴重な伝統文書のコレクションは、ほとんどが救われました。書籍のほうはかなりの部分が失われてしまいました。

悲劇的だったのは大学中央図書館のほうです。大学のキャンパス全体が日本軍に接収されたので、図書館も日本軍が使用することになりました。図書館の1階には日本軍の小さな医薬施設が開設され、薬品類が置かれました。接収に先立って当時の大学中央図書館長であったウー・キンゾー [U Khin Zaw] は、英軍に参加して図書館から離れていましたので、誰も管理する者がおりませんでした。接収前後の空白期間にビルマ人住民による略奪が始まりました。この状況を目にしたビルマ独立義勇軍のアウンサン将軍の配下、ディードック・ウー・バチョウらが、これを阻止したいと思い日本軍に訴えたそうです。すると日本軍は略奪していた者を見せしめに射殺し、その後略奪がやみました。

日本軍の兵隊の中には、そこにある書物の価値がわからないので、炊きつけに使ってしまうものもあったそうです。

1945年、日本が敗北を喫し撤退する時になると、日本軍は図書館にダイナマイトを仕掛け、これを爆破してゆきました。これは医薬品を爆破するためであったと考えられています。この爆破で図書館の屋根と土台が破壊され、四囲の頑丈な壁のみが残りました。中にあった書籍や文書はすべて焼け落ちてしまいました。G. H. ルースのコレクションも図書館の中に置かれていたので、これも失われました。

また、日本軍の占領中にマニユスクリプトの一部が持ち去られたと言われています。これについては、何度か調査が行なわれましたが、日本に到着した形跡はどのような様子もありません。日本に到着していれば、日本のビルマ研究者のどなたかの目にとまっているはずだと思うのですが、そういう報告は皆無です。

戦争や内戦は、図書館にとってほんとうに残酷な敵と言わねばなりません。

—そうでしたか…。当時の状況を考えると、日本にまで到着している可能性はほんとうに少ないように思われます。当時の関係者も、数少なくなっているでしょうが、占領下の図書館の問題や持ち出されたマニュスクリプトの運命がどうなったのかについて、日本側からも調べてみる必要を感じます。

—私たち東京外国語大学の21世紀COEプロジェクト「史資料ハブ地域文化研究拠点」(C-DATS)が、ミャンマーで大学歴史研究センターとの共同事業として折畳み写本、貝葉文書の保存・共有事業をはじめるとあっては、ウー・トーカウンさんにいろいろお知恵と助力を頂きました。おかげさまで立ち上げが可能となり、こうして2年半の間に多数の写本の撮影、マイクロフィルム作成、デジタル化を順調に進めることができました。このプロジェクトについて、ミャンマー側の一員としてどう評価されているか、また何か問題点がありましたら、それらの点についても率直なところをお聞きしたいのですが。

ウー・トーカウン：C-DATSとの共同プロジェクトにより、多くのマニュスクリプトが、マイクロフィルム撮影とデジタル化という手段で保存できるようになったことをとても喜んでます。ミャンマーにはまだまだ極めて貴重な貝葉や写本が、保存の手が届かずに各地に存在して、そのままでは朽ち果て読めなくなるものもたくさんあります。最近でもモン族の王朝の故地である下ビルマ、タトン地方に多くの貝葉があることがわかりました。これらは、僧院に蔵されていますが、適切な保存の措置はとられていません。

C-DATSでは、オリジナルの文書をけっしてもとの場所から動かさない、非取奪的な保存、共有に徹すると言う理念をはっきり掲げており、厳密にそれが守られていますので、こうしたプロジェクトであればとても歓迎したいのです。保存、整理を進めるべき伝統的な文書、放置されて破損が進みつつある文書が国内各地に多数残っています。私たちは、専門家、機材、資金などあらゆる面での不足に直面していますので、このプロジェクトによる協力を高く評価しています。

—ほかに外国の大学とこうした協力を進められたことがあるのでしょうか。現在もこのようなプロジェクトがほかにあるのでしょうか。

ウー・トーカウン：1991年から93年にかけて、コーネル大学の協力によって約千冊の写本、貝葉文書を撮影、マイクロフィルムにおさめ、合計100巻のマイクロフィルムが作成されました。これが最初の事例です。当時ミャンマー教育省は、ミャンマーの伝統文書である写本、貝葉文書のマイクロフィルムを外国大学の協力の下に作成し、そのコピーが国外に出ることに否定的でしたが、パーリ語、歴史学、東洋学、図書館学の4人の教授で委員会を作り、問題のない文書だけを選んで写しているのだという説明を行なって認可されました。

その後の外国大学による協力は現在のC-DATSとの共同事業だけで、ほかにありません。

—最後に、こうした国際的な協力を行おうとする外国の研究機関、大学あるいは個人に対して、どのようにプロジェクトを立ち上げ進めてゆくべきか、ご助言がありましたら、ぜひお聞かせください。

ウー・トーカウン：そうですね。やはり刺激しすぎるとうまくゆきません。ですから派手な宣伝はしないように。そしてマニョスクリプトと言う言葉は使わないほうがうまくゆきそうです。静かに、かつゆっくりと進める必要があります。ゾーギーに“バイダーパン”という詩があるのを知っていますか。

—ええ、私もとても好きな詩です。ミャンマーのことを考えるとき、よくこの詩が頭に浮かびます。

ウー・トーカウン：エーヤーワディの支流に浮かぶバイダーパン（ホティアオイ）のように、大波を何度被ってもけっして沈んでしまわない、そして水路が倒木やごみでふさがっていれば、ほかの水路を探し出す、こうした智恵が私たちに必要なのだと思います。

—そうですね。そのような智恵を持ちたいと思います。今日はほんとうにありがとうございました。これからもお元気で活躍していただけることを念じております。

ウー・トーカウン：こちらこそ、どうもありがとうございました。



左：ウー・トーカウン氏 中央：ミョウミン博士（仏教振興局長） 右：トーフラ博士（前大学歴史研究センター長・ミャンマー伝統文書保存委員会書記）